

皇太子殿下の

水にかける思い



よしむら かずなり
吉村 和就

グローバルウォーター・システム代表
国連環境技術顧問
麻布大学客員教授

今、世界中から日本の水処理技術が注目されている。世界的に不足する水資源の確保、それに使われる海水淡水化用の膜（RO膜）や、日本の水管理技術の優秀性である。

このような技術的な情報発信は多くの企業や大学などによって海外になされているが、日本人と水との共生について歴史を持って語られた事例はほとんどない。世界的な識者から見ると日本の皇太子殿下が水研究に深い造詣を持つておられることはよく知られているが、日本国内では、「皇太子殿下と水問題」について語られることが少ない。ここに皇太子殿下の水にかける思いを紹介させていただきたい。

日本が存在感を示した第五回世界水フォーラム

水道事業の民営化においては海外の後塵を拝している我が国だが、筆者も参加した二〇〇九年三月トルコ・イスタンブールで開催された第五回世界水フォーラムでは、かなりの存在感を示すことができた。参加登録者数は過去最大級の百九十二カ国、約三万三千人の関係者が参加し、改めて世界が「水」に対して高い関心と危機意識をもっていることを裏付けた。今後、人類が抱える「水危機」をどのように認識し、向き合っていくべきかを考える最適な機会となったといえるだろう。

ロイ・フォーション世界水フォーラム会長が開会式辞として、次のような挨拶を行った。「世界は経済発展に伴って水の需要も飛躍的に高まり、深刻な水不足に陥っている。今後、私たちは責任を持って水を管理しなければならない。水問題は全人類共通の問題である。今回のメインテーマは、水問題解決のための橋を架けよう」であり、次世代のために新しい橋、しかもできるだけ多くの橋が必要である」と。

皇太子殿下の開会式での挨拶

皇太子殿下が開会式にご臨席された。殿下は日本で開かれた第三回世界水フォーラム、メキシコで開かれた第四回の水フォーラムに続く参加である。開会式でご挨拶をされたので、要約してご紹介させていただく。

「二〇〇八年の国際衛生年から引き続き、現在、そしてこれからもトイレの設備や、し尿処理、下水処理など効率的にすることが問われています。私は前回（メキシコ）の世界

水フォーラムでは、日本の江戸時代に極めて貴重なものとされていた「金肥」の話を致しました。古来、日本国民は、し尿を貴重な資源として活用し、共通の利益を生み出して参りました。

今日、世界は水災害、水不足、海面上昇、飲料水の不足、ヒマラヤの氷河の減少など、異なった問題が数多く提起されておりあります。私たちは世界に向けて知識を共有し、国際社会と協調して水問題の解決に取り組むべきだと考えます。

今こそ知識と叡智を傾け、行動を持って解決し、世界の隅々まで水を届けましょう。シルクロードを行くキャラバンのように、新しい時代に新たな勇気を与えることを祈ります」

そして最後にはトルコ語で、

「この世界水フォーラムが有益で成功したものになることに期待致します」

と締めくくり、会場から大きな拍手がわき起こった。

続いてトルコ共和国のアブドゥラー・ギョル大統領は、

「トルコは二千年余りの歳月を経て人種的交流、幾多の文明や文化の架け橋になってきました。水についても世界の架け橋となる地理的な交差点だけでなく、歴史ある水文化を融合させる最高の地であり、水、すなわち文明」と考えています。現在、世界では十億人以上の人々が安全な水にアクセスできず、二十五億人の人々は衛生的な環境にありません。水に関することをすべての人々と共有し、水問題解決のための橋を架ける具体的な提案をイスタンブールから発信し、その成果が世界に広がることに期待します」

と、力強く宣言した。

聴衆に感動を呼んだ皇太子殿下の基調講演

開催二日目、皇太子殿下が基調講演を行った。テーマは「水とかわる——人と水との密接なつながり——」。

皇太子殿下は日本人が歴史の中でいかに水問題と取り組んできたか、歴史的な考察と具体的な事例を挙げて語られた。聴衆の胸を打ったその内容を、要約してご紹介させていただきたい。

「弥生時代の唐古・鍵遺跡の環壕集落（多重な楕円壕で囲まれた集落）は、外敵から集落を守る防衛だけではなく、洪水防止、稲作のための農業用水供給、さらには汚水の浄化など多様な役割も果たしました。」

また、歴史の中で水災害を繰り返してきた大河の治水や利水方法も我が国が誇るべき技術です。関東を流れる利根川では、たびたび大洪水が発生しましたが、徳川家康はこれを力で抑えるのではなく、下流域への洪水被害を減らすために利根川の中流域に築かれた中条堤（対岸の堤防に比べて壊れやすい堤防、遊水池機能）や、さらに六十年以上かけて利根川の流れを東京湾（江戸）から太平洋側（銚子）へ変えたことです。「利根川の東遷」などを行って江戸の城下町を守ったのです。それと同時に、両岸付近に広がる房総平野の

水田や畑地の開墾を奨励したのです。(後略)」

皇太子殿下は日本の歴史的な水に関する事例を、自らが撮影した写真や制作した図表を用いて分かりやすく説明され、最後には、「日本には災害は忘れた頃にやって来る」ということわざを紹介し、災害が起こってからでは遅い。今から一歩ずつ地道に水災害を防ぐ持続可能な取り組みをするべきでしょう、という提言をされた。

日本の皇太子殿下の水に対する真摯な姿勢、研究内容の深さに対し、世界中から集まったメディアや水ビジネスの関係者を感動させたのである。

温度の低い日本のマスメディア

基調講演からお分かりのとおり、皇太子殿下の「水問題への造詣の深さ」は、グローバルな水関係者の間では特に有名である。英国留学時代のご専門はイギリス・テムズ川の水運であった。二〇〇三年、日本で開催された第三回世界水フォーラムでは、名誉総裁としてご出席され、「京都と地方を結ぶ水の道」という興味深いテーマで記念講演をなされている。

また、二〇〇六年メキシコで開催されて第四回世界水フォーラムでは「江戸と水運」をテーマに講演され、さらに二〇〇八年のスペイン・サラゴサで開催された水の万博では特別講演として「水との共存、人々の知恵と工夫」を講演され、最後のスライドでは「イギ

リス留学時代に訪れたスペイン・セゴビアのローマ時代の水道橋」の写真も掲げられていた。

このように皇太子殿下は長年にわたって、世界各地で水に関する専門的な講演を行われ、世界中に「いかに日本人が真摯に水に取り組み、共生してきたか」という情報発信をなされている。その結果、世界中のマスコミが皇太子殿下の写真と共に講演内容を紹介する記事を掲載しているのだ。

しかし、海外メディアの動きに比べると、我が国のマスコミは温度が低い。日本国内において皇太子殿下の水への関心、その取り組みの高さや世界水フォーラムでの講演内容に関する報道があまりにも少ないのが残念でならない。トルコでの世界水フォーラムから帰国後、私は日本のメディア報道を検証してみた。皇太子殿下がトルコを訪問し、講演を行われたという事実は数多く報道されていたものの、詳しい講演内容にまで言及したマスコミはほとんどなかった。

少なくとも本書を手にしておられる読者諸君は、宮内庁のホームページから皇太子殿下のご講演記録を訪ねてほしい。

〈本文は筆者著「水ビジネス110兆円―水市場の攻防」角川書店(二〇一〇年八月三版)より抜粋、加筆したものです。〉